【基調講演】

自然と共生するカラダ
―修験道儀礼と身体感覚―

宮家　準

序　自然と修験道

自然は人工物または人工現象に対して、天体（日・月・星）、無機物（空気、石・土、火）、有機物である動植物やこれらが引きおこす現象をさしている。広義には人間も自然に含まれている。なお東アジアでは人間は一体不可分の「ココロ」と「カラダ」から成るとされている。ところで現在原発事故以来、原子力にかわる自然エネルギーを開発し、人類と自然の共生をはかるべきだとの議論がなされている。この立場は自然を人工の科学技術で統御するのではなく、自然の一部である人間は自然と共生し、自然の摂理にのっとった「おのずから」なる生き方をすべきだとの視点に立っている。

本シンポジウムでは、カラダの資料性を各学問分野、研究視角から提示し、それをクロスさせ統合することを意図している。そこで私は日本の典型的な民俗宗教である修験道をとりあげ、その儀礼の持つ象徴的意味、それが身体にひきおこす感覚、そこに見られる自然や自然の摂理との共生のあり方を紹介することにしたい。

一般に宗教は自然に対して科学技術で対応し得ない事象への超自然的解釈、解決をするとされている。修験道は日本古来の神社神道、仏教、道教、シャマニズムなどが習合して、13 世紀頃に成立した。この宗教では山中を抖擻して修行することにより、岩・木・滝などの自然の中に観じたカミを権現として崇め、それと同化して得た超自然力を用いて呪術宗教的な活動をすることを目的としている。ただ、その歴史において、仏教教団に包摂されることが多かったことから、大日如来、不動明王などの諸仏を崇拝し、これらと同化することを成仏と捉え、その力を用いて呪術宗教的な活動をなし得るとしている。

本発表では、修験道の峰入修行、その成満や法要の採（柴）灯護摩、修験道独自の託宣儀礼である憑祈祷、憑きものおとしと調伏、供養儀礼をとりあげて、そこにおける所作、その意味、それが身体にひきおこす感覚、自然との共生感覚を紹介することにしたい。

1　修験道の峰入――衣体、羽黒、大峰

日本の民俗宗教では霊山は山の神を始めとする神霊の居拠、死霊の祖霊化する場所、生児の魂の原郷である母なる山とされている。修験道では仏教の影響を受けて、大峰山などの霊山は金剛界、胎蔵界の曼荼羅そのもの、これを神格化した大日如来、その教令輪身である不動明王をはじめとする諸仏諸尊の居所としている。なお民間信仰では祖霊が神格化した山の神は春さきに里に降って田の神となり、水田稲作を守護したのちに秋に山に帰るとされている。修験道の峰入をこれに準じて分類すると、秋に山の神と共に峰入する秋の峰、山の神と同様に山中で冬を越す冬の峰、春に登拝して山の神に花を供えて迎える春の峰（華供の峰）、夏の盆の頃に祖霊を迎える夏の峰の四季の峰入に分けることが出来る。この四種の峰入のうちで最も本格的なものは、山の神と共にその居拠である山中の窟に臥して、その力を獲得して春に山を下る冬の峰である。その面影を今に伝えているのは、秋口に羽黒神社の斎館に籠り、大晦日に出峰する二人の松聖の行である。二人は出峰の日の松例祭で太陽を象徴する烏と、月を象徴する兎

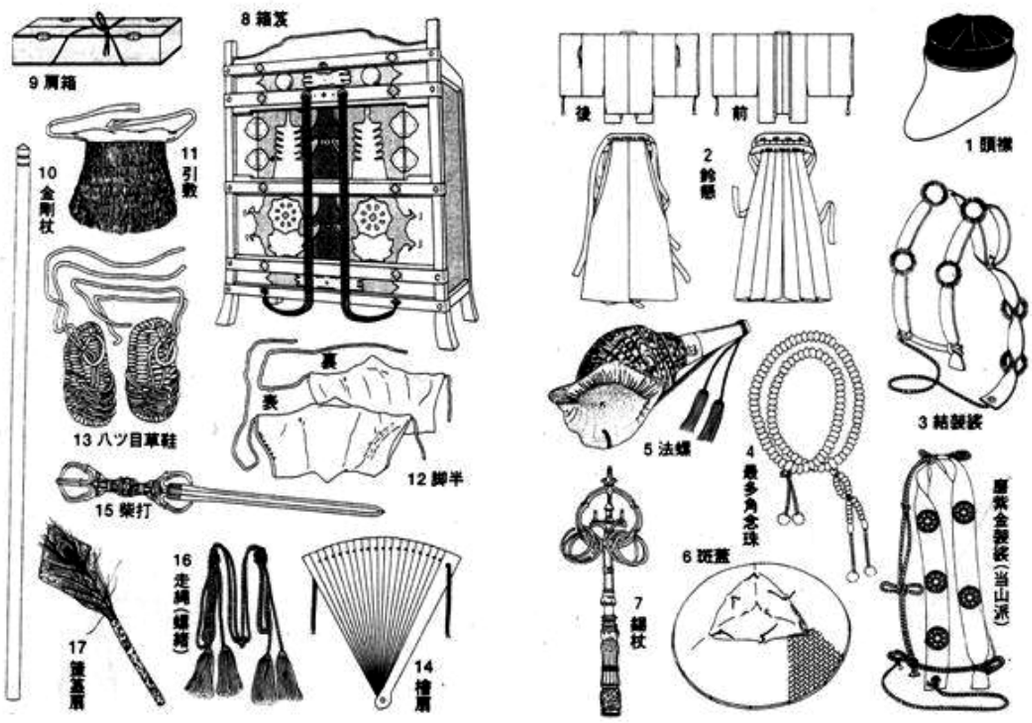

図１　修験の衣体図（宮家準『修験道―その歴史と修行』講談社学術文庫より）

を操作する力、聖なる火を統御する力を競っている。

ところで修験者は山伏十六道具と通称される16の衣体を身につけて峰入している。そこで以下図1にあげたこのそれぞれについてその特徴と意味を簡単に紹介する。1（図の番号、以下同様）頭襟は大日如来の宝冠、2鈴懸の上衣は金剛界、袴は胎蔵界である。なお鈴懸の略装には修験者が本尊と崇める不動明王の種子を記したカンマン衣がある。3結袈裟は不動袈裟とも言われ不動明王を示す。その淵源は注連とされている。4最多角念珠はソロバンの珠状の108珠からなり、これを揉むことによって煩悩を滅することを示す。5法螺は法螺の文に「三昧法螺声、一乗妙法音、経耳滅煩悩、当入阿字門」とあるように、煩悩を滅して悟りに導くものである。6斑蓋は母の胞衣、7錫杖の6つの円環は六波羅蜜の行を意味する。峰中の本尊を入れる8箱笈は胎蔵界、切紙や現参帳を入れてその上に乗せる9肩箱は金剛界で、両者で金胎一致、男女和合。10金剛杖の上部の塔婆は金剛界・上求菩提、下部の円杖は胎蔵界・下化衆生。腰につける11引敷は、毛皮の動物が凡、修験者が聖で凡聖不二。12脚半は上の三角が金剛界、下の円状が胎蔵界で金胎不二。13八ツ目草鞋は八葉の蓮華座。14桧扇の火炎形は煩悩消除。15柴打（剣）は不動明王の利剣。16走縄（螺緒）は母胎とつながる臍の緒とされている。このほか首につける17篭蓋扇には飛翔を示す孔雀の羽がつけられている。それ故、総じてこれらの十六道具は、金剛界・胎蔵界の宇宙、不動明王、煩悩を滅して成仏すること、受胎し、胎児として成長することを示している。そしてこれらを身につけて峰入する修験者にこのことを身体感覚を通して認識させているのである。今一方でこれらの衣体は頭襟のうち巻頭襟は鉢巻のように身をひきしめさせ、鈴懸は「木の葉衣」「葛衣」ともよばれるように身にまとった木の葉や葛に淵源があると考えられる。現在の麻の鈴懸も風を感じさせるものである。襷と関連するとも解される結袈裟、螺の緒や脚半は身体をひきしめ、草鞋は大地のぬくもりを感じさせるものである。それ故これらの衣体は峰入する修験者に、自然との共観、共生感覚をひきおこすと考えられる。

中世来の峰入を伝える羽黒山の秋の峰（8 月 24 日～9 月 1 日）では初日に峰入者は山麓の正善院で葬儀を象徴する「笈からがき」をする。ついで黄金堂前で男根を示す大幣を倒すことによって受胎し、母胎になぞらえた山中の荒沢寺に入る。同寺では母胎内の胎児を象徴する斑蓋をかぶせた笈に向かって、その成長を祈るかのように勤行がくり返される。この間各自の仏性を確認する床精べのあと、密室内で煙で燻される南蛮いぶし（地獄）、断食（餓鬼）、水断（畜生）、相撲（修羅）、懺悔（人）、謡（天）、聞法（声聞）、山中の抖擻（縁覚）、施餓鬼（菩薩）、秘印伝授（正灌頂）の成仏の過程とされる括弧内にあげた十界になぞらえた修行が行なわれる。また峰中で成満の採灯護摩が施行される。これら一連の修行をおえた入峰者は 9 月 1 日に村人がホトケ迎えに焚く門火を産声をあげて跳び越えて、自己の即身成仏を確信するのである。

大峰山の山上ヶ岳では修験者は奈良県吉野郡天川村洞川の龍泉寺山門の発心門をくぐって境内の池で死を象徴する水行をする。ついで山上川をさかのぼって、燈籠の岩屋で胎内くぐりの行をして、清浄大橋を渡って女人結界の修行門から山に入る。林の中を登り、7 合目の吉野道との合流点に至る。ここからが表行場で、油こぼし、鐘掛、お亀石などの修行をして西の覗きに至る。ここで肩にロープを掛けて断崖から逆さづりにされて懺悔したあと、「西の覗きで懺悔して彌陀の浄土に入るぞ嬉しき」との唱え言をする。等覚門をへて達する山頂近くの宿坊で休息後、裏行場の修行がある。この最後の断崖に突き出た平等岩を回った後、「捨つるいのちは不動倶利迦羅」との唱え言がある。捨身後倶利伽羅不動として再生するのである。これらの行をおえると、大峰山寺に詣でて勤行する。採灯護摩がなされもする。このように簡略化した現在の山上詣にも、胎内くぐり、浄土入り、倶利迦羅不動としての再生の信仰が見られるのである。なおこの山上ヶ岳から小篠、弥山、釈迦ヶ岳、前鬼をへて熊野に至る峰々を抖擻する奥駈がなされてもいる。

修験道最極の教義書『修験修要秘決集』には、修験道では「樹頭（梢）に吟ずる風、砂石を打つ波の音を法界の音声」とし、これを法爾常恒の経とするとしている。周知のように仏教では外来の自然を内面化して生きることを「自然法爾」としている。とすると修験道では自然の中を抖擻し、自然の音を経と観ずることによって、この境地に達することを修行の目的としていると考えられるのである。今一つは、峰入を通して自己の心身の状況を知ることである。峰入では修行者は自己の身体の状況を考えて、一歩一歩に心を込めて足を進める。また歩きながら自己の過去、現在を内省し、将来を慮る。仏語で云う「如実知自身」の境地に達することを目指しているのである。

2　採（柴）灯護摩と火渡り

採（柴）灯護摩は峰入修行の成満や法要の際に施行される。この護摩は道場結界に関する前作法、読経を伴う護摩供から成るが、その後火渡りと通称される火床三昧法が行なわれることもある。そこで以下、前作法、護摩供、火渡りの所作、その意味、修法者の身体感覚を紹介する。なお峰中での採（柴）灯護摩は採・柴の字が示すように、山中で集めた木や柴を積みあげて火をつけ、清水の水（閼伽水）でその火を消していた。しかし一般には護摩の斎場の周囲に結界の注連を張り、前方に祭壇を設えて、中央に約 1.6m の松の丸太 16 本を井桁に組み、中に割り木を詰め周囲を檜葉で覆った護摩壇が作られる。斎場には採灯師を始め本山衆が並ぶ、前作法にさき立って道場入口で斎場内の本山衆の代表と旅の先達（客僧）の間で山伏問答がある。この問答では本山衆の代表が旅の僧に参加の意図、山伏の字義、修験の宗旨、開祖、本尊、衣体の意味などを尋ねている。この問答によって、法要の性格、修験の本尊や教えを、山伏十六道具などの説明を通して一般の参加者に知らせている。これに続いて旅の山伏から本山衆の代表への笈渡しの儀礼がある。

前作法は法弓、法剣、斧である。法弓は四方、中央、五大明王と龍王鬼門の龍王に除魔を願って矢を

放つものである。法剣は護摩壇に向かって不動明王の利剣を示す剣を抜いて、衆生の煩悩を切るとの趣旨の文を唱えて、光の字形に振り、光に乗って招来した天の諸童子の助けで魔を祓うことを示している。斧の作法では山の神に木や水を授けるように願ったうえで、斧を中央、左、右に振りおろしている。それ故この三つの所作で除魔、煩悩消除、山の神への護摩木や水の提供依頼を示している。

採灯護摩の修法ではまず祭壇の神灯から二本の松明に点火し、護摩壇正面でそれを交叉した前で採灯師が願文を読んだ後で護摩壇に火がつけられる。採灯師は護摩壇の前で印を結び微音で真言を唱えて修法する。その内容はまず護身法で心身を清め固め、護摩壇を建立する。次いで火天を招く火天壇、本尊不動明王を招いて祈念をこめる本尊壇、参加者に諸尊の守護を祈る諸尊壇が行なわれる。この間採灯師は護摩壇の左・右と前で数回大地を踏みしめるような所作をしてうえで長い又木の散杖で護摩壇を加持し、柴打で加持した護摩木を投じ、桧扇で火を煽る所作をする。この間周囲の修験者が経頭の導びきで読経する。火がほぼ鎮まると、信者の願い事を記した護摩木を護摩壇に投じる添護摩が行なわれる。

ところで冒頭の護身法は浄三業、仏部、蓮華部、金剛部、被甲護身の五印を結ぶことによって自己を浄化し成仏の上で身固めをする修法である。もっともこの修法に関して「護身法大事、大師御口伝」では、浄三業は即身成仏、仏部は二滴（男女の精）が和合して母胎内で仏身を生じる意、蓮華部は足の指10本、金剛部は手の指10本が整う意、被甲護身は胎内で10ヶ月をへて出生する意としている。なお護摩供の間の周囲の修験者の読経は錫杖を振りながら錫杖経、般若心経、不動経、諸真言、宝号、本覚讃などを高音でリズミカルに唱えるものである。

この採灯護摩の施行中斎場内の修験者は最初は煙を吸いこみ、次いで火が燃え盛るにつれて、身体が火のように熱くなる。この感覚はシャマニズムに於いてシャマンが火の儀礼で身体に内なる火を点じるとされていることを想起させるものである。ちなみに採灯護摩の本尊の不動明王も火炎を背おっている。

採灯護摩が終わると、壇木を両側に並べその内側に壇中の炭火を集めて、平たくする。そしてその前で導師によって火生三昧の修法がなされる。護摩の喧騒に対して静寂の中で導師は護身法後、不動明王と同化する印を結び「火生成水」「身火本」と唱える。次いで八大龍王や水天を招き、水によって火を鎮めると観じる。そして最後に立ちあがって、不動明王の秘印を結んで火を渡る。ついで護摩に携わった修験者、一般信者の順で火渡りがなされる。ここでは自己を火と観じると共に今一方で水天により火を鎮める修法をしている。自己が火に変じれば火上を歩むことは可能である。だが今一方で信者らのことを考えてか、水で火を鎮める修法もなされているのである。

3　修験道の憑祈祷――託宣

修験道独自の託宣儀礼に修験者が憑りましに神霊を憑依させて語らせる憑祈祷がある。この憑りましになるのは修験者の妻など巫女が多かったが、男性が務めもした。両者はともに事前に水行をして身を清めている。その修法の一つ「無言加持の次第」では斎場の周囲に注連を張り、正面に祭壇を設ける。この祭壇を背にして修法者に向かって白衣を着て目かくしをして合掌した両掌に御幣を持った憑りましが座る。修法者は護身法のうえで、不動明王、五大尊と同化したうえで憑りましの仏性を開かせ、童子を使役することを示す印明の後、不動の剣印を結んで眷属の童子に神霊を導かせることを示す修法をすると共に、「天上天下唯我独尊、トロトロウン、神女の頭に移るうれしや」と三度唱えるなどする。周囲の修験者は太鼓をたたき、般若心経、不動経、錫杖経などを錫杖を振りながら大声で唱える。そうこうしているうちに憑りましの持つ御幣が上下にゆれる。すかさず修験者が憑りましに憑いた神霊に種々の問いかけをする。その回答は多くは一言程度の短いものである。それを終えると修法者は憑りましの肩と背中に錫杖をあてた後に憑りましの両掌の御幣をとりあげて、「物の気を引いて放つぞ梓弓、受けと

りたまえ今日の聞神」などと唱えて修法を終えている。

これをみると四方を結界した浄域で自己の身心を固め、不動明王、五大尊と同化した修法者が憑りましの仏性を開かせ、不動明王の眷属の童子に神霊を導びかせ、それを憑りましに移らせている。その際神霊が来ることや、憑依した神霊が喜んでいることを示す唱え言がなされている。周囲の修験者の太鼓をたたき、法螺を吹き、錫杖を振る所作は太鼓によって悪霊がよりつくのを防ぎ、法螺や錫杖によって憑りましの煩悩をのぞいて菩提に導びくことを示すとしている。

なおこの憑祈祷は憑りましの身体感覚を一種の催眠状態に導びいていると考えられる。すなわち平素ともに水行、読経などの修行をし、強い師弟関係で結ばれた修法者と憑りましの間には信仰に支えられた深い信頼関係がある。憑りましには被暗示性がありもする。その憑りましに目かくしをさせることによって、外界から離脱させ、下意識を前面に押し出している。そして突然の太鼓、法螺、錫杖により驚愕させる。また読経の反復により心理的退行をもたらしている。そのうえで囁くような修法者の神霊の招き、憑依した神霊が喜ぶかのような唱え言が、憑依者に神霊が憑いたかのような暗示を与える。無意識に口が開くと、すかさず修法者が問いかけ、託宣を求めている。うがった見方をすれば、憑祈祷は修法者による催眠術と解されないでもない。ただ修法者は自己が不動明王と同化し、その童子を使役してこの憑祈祷を達成したと信じて、自己の神霊操作者としての能力を確信している。ちなみにこうした憑祈祷は木曽御嶽講の御座、美作の護法祭、福島の葉山祭や石見の大元神楽の託舞などの芸能にも認められるものである。

4　憑きものおとしと調伏

修験道では災因は憑依霊や邪神邪霊の祟りによるとされ、それを除く修法がなされている。まず憑きものおとしをあげると、比較的簡単なものに筒封じがある。この修法ではあらかじめ竹筒の両端に和紙を張り、その一方の内側から細い紐を長くたらしたものを準備する。修法者は祭壇前で患者と向かいあい、筒につけた紐の端を患者の両掌の指に巻きつける。そのうえで修法者は護身法を結び、患者の仏性を開かせると共に不動明王と同化して童子を使役して憑依霊を追いたてさせる修法をすると共に、憑依霊にもとの住処に帰るように諭す唱え事をする。そのうちに患者の両掌が上下に動く、それに伴って紐が振動する。修法者はすかさず患者の紐をはずし、竹筒に入れて密封する。患者は気をとりもどす。修法者は竹筒を縄でぐるぐるしばって小祠などの裏に埋める。これが筒封じの修法である。この修法では手や紐の動きを通して、修法者は患者の憑依霊が落ちたことを確信するのである。この修法が成立する前提には、患者の側では近くの稲荷社などで不遜な行ないをしたとの反省があり、修法者がそれを同社の使霊の狐などの所為にし、患者もそれを信じていたというような背景があると考えられる。

より本格的な憑きものおとしに「邪気加持法」がある。この修法では修法者は護身法で身を固め、大日如来と同化後、病人の五臓に五大尊を観じたうえで、病人の背後で慈救呪を唱えて、首、肩、両足の指に五鈷杵をあてて、順・逆各100回加持をする。すると追いつめられた憑依霊が患者の足の小指の先から出るので、それをつかまえて二度と憑かぬように結界する。このほか火や煙で燻し出す憑きものおとしもなされている。

祟っている邪神、邪霊に対する調伏は教え諭して祟りを止めさせたり、剣、弓矢、鞭などで懲らしめてそれを止めさせるものである。もっとも基本的なものは、九字の法である。この修法は不動の剣印を結んで「臨兵闘者皆陳烈在前」を一字ずつ唱えながら、空中を縦・横に賽の目状に九回切るものである。この九字は「兵に臨んで闘う者は皆、列をのべて前にあり」と読み、不動の剣印で邪霊を切り刻んで調伏することを意味している。九字はより精緻な調伏法にさき立つ身固めとしても用いられている。なお「陣払法兵法番大事」では、九字の臨は父母の和合、兵は胎内で人体を得ること、闘は男と女の区別を生

図２　『追善供養のすすめ』

じること、者は坐臥が自由になること、皆は人智を得ること、陳は五体が整うこと、烈は手足が動くこと、在は現世の作法を知ること、前は胎内を出ることというように、九字で切られた邪霊が新たに再生する修法との説明がなされている。

5　追善供養の絵とき

通夜、葬儀、初七日から始まり三十三回忌の弔いあげで終る 13 回の供養儀礼は死者を成仏させる儀礼であると共に、残された遺族の悲しみを癒し、新たな生に向かわせる営みである。そこで岡山県瀬戸内市笠加の当山派修験の熊野比丘尼が近世初期以来未亡人に亡夫の供養をすすめる為に用いたと考えられ

表１

供養：土葬（棺に臍の緒）、33回忌（弔いあげ）で成仏・カミ					峰入：学峰『峰中秘伝』「笈渡しの事」 17世紀末成立		
仏事	守護仏	成長	成長状況	説明	守護仏	成長過程	修行・場所
通夜	聖天	受胎	赤白二滴交わる	添い寝	吉野川で水行、健向門で「みとのまぐわい」		
初七日	不動	1月	重く感じる	金剛杵（男） 蓮台（女）	梵天・不動	父母の和合	子守 ・勝手で行
二・七日	釈迦	2月	玉と稲	如意宝珠・錫杖	帝釈・愛染	右目	無明（安禅か）
三・七日	文殊	3月	頭と身体	三鈷杵	閻魔・軍荼利	男・女の姿	聞法開悟行
四・七日	普賢	4月	顔と腹	蓮華が開く	四天王 ・大威徳天	六根、皮と肉	鐘かけ、西の覗
五・七日	地蔵	5月	六根がめばえる	輪廻を知る	十二神・不動	音声を出す	洞川
六・七日	弥勒	6月	五体が整う	五輪・三昧耶形	八大金剛童子 ・聖天	手足が動く	（小篠か）
七・七日	薬師	7月	六根が整う	六道を行じる	大歳神 ・大荒神	六根・九穴	阿古滝
百箇日	観音	8月	法身	輪宝と五輪	二十八部衆、 千手・馬頭	五体が整う	神通寺の滝行
一周忌	勢至	9月	生身の仏身	丸が力	天の二十八宿 ・毘沙門天	出生	稲村ヶ岳、両手を 開いて阿吽
三回忌	阿弥陀	10月	出生	魂魄を得る			
七回忌	阿閦	今世	渡世の知	悟りを得る行			
十三回忌	大日	老人	父母の恩				
三十三回忌	虚空蔵		生滅なし	五行五智を知る			

る絵巻の「追善供養のすすめ」（仮題）を紹介したい。なおこの地方は当時は土葬で、入棺には出生した時の臍の緒を入れる慣習があった。

この絵ときでは十三仏事のそれぞれを示す図2の絵を、表1の左欄にあげたように全体として、受胎、母胎内での成長、出生、その後の成長に位置づけて説明している。すなわちまず通夜には添寝がなされるが、これは天地合体、赤白二滴が交わることを示すという。初七日は妊娠一ヶ月目（以下月で示す）にあたり、守護仏は不動（以下括弧内に示す）で、金剛杵（男）と蓮台（女）が合体して、阿字を生じる、女性は腹を重く感じ妊娠を知る。二・七日、2月目（釈迦）には胎児は如意宝珠と錫杖で示した稲（穀霊）の形になる。三・七日、3月目（文殊）、頭と両耳が生じる。三鈷杵で示す。四・七日、4月目（普賢）開いた蓮華で頭と両足が整ったことを示す。五・七日、5月目（地蔵）、六根（眼・耳・鼻・舌・身・意）がめばえ、輪廻を知る。六・七目（弥勒）、五体が整う。五輪で示す。七・七日、7月目（薬師）、六根が整い地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天の六道の道を歩む。百箇日、8月目（観音）、法身の大日如来となる。輪宝と五輪で示す。一周忌、9月目（勢至）、強靭な生身の化身となる。三回忌、10月目、魂魄を得て出生する。七回忌、今世（阿閦）、悟りを得、渡世の知恵を知る。十三回忌、老人（大日）、父母の恩を知る。金胎の大日で示す。弔いあげの三十三回忌（虚空蔵）、五行、五智が整い、生滅を超越する、としている。このようにこの絵巻では未亡人に対して死者はかつて彼女が夫の精を宿して胎児を孕み、育んだように、生まれた時の臍の緒で母なる大地とつながって、その中で成長して、不生不滅の存在になるとしている。換言すればこの「追善供養のすすめ」では、女性としてのおのずからの道（自然の摂理）である、受胎、母胎内の胎児の成長、出産という身体感覚を追体験させることによって、死者の母なる大地での仏としての成長、出生を確信させて、その心を癒し、生きる力を与えるものとしてあたかも彼女が胎児を育んだ時に食を満たしてすごしたように供物を供えて追善供養することをすすめているのである。

ところで興味深いことに、17世紀末に当山派修験学峰が著した『峰中秘伝』では第1表右欄にあげた説明がなされている。すなわち入峰者は三途川に比定された吉野川で死を意味する水行をして、健向門（発心門か）で男女の交わりである「みとのまぐわい」をする。その後の峰中の修行は同書の「笈渡しの事」の条によると、胎内修行とされ、1月目は梵天とその垂迹の不動（以下括弧内に守護仏をあげる）の守護のもとで、吉野の子守・勝手社の行で身体の形を生じる。2ヶ月目（帝釈、愛染）は安禅で修行する。3ヶ月目（閻魔、軍荼利）の聞法開悟の行で男女の姿（修行地不明）、4ヶ月目（四天王、大威徳天）の鐘かけと西の覗きの行で六根と皮肉が整い、5ヶ月目（十二神、不動）の洞川の行で発声が可能となる。6ヶ月目（八大金剛童子、聖天）の小篠の行で手足が整う。7ヶ月目（大歳神、大荒神）の阿古滝の行で六根と頭に7つ下半身に2つの九穴が整う。8ヶ月目（二十八部衆、千手観音、馬頭観音）の神通寺の滝行で自在の心が生じ、9ヶ月目（天の二十八宿と毘沙門天）の稲村岳の行で、両手を開いてア・ウンと唱えて出生するというように大峰山の山上ヶ岳の峰入を死後、母胎とされる山中で9ヶ月かけて成長し、仏として再生する営みとしているのである。しかもこの出生の場所が女人道場の稲村ヶ岳であることは、きわめて象徴的である。このことから推測すると、さきの女性に追善供養をすすめる絵巻は、この学峰の『峰中秘伝』などを参考にして創作されたとも推測されるのである。

結　修験道儀礼の相互関係

最後に修験道の峰入、採灯護摩、憑祈祷、憑きものおとし、調伏、供養儀礼の意味とそれが身体感覚にもたらすもの、そこに見られる自然との共生のあり方を要約し、その相互関係を検討しておきたい。まず峰入修行では入峰者は一度象徴的に死んだうえで母胎とされた霊山で十界修行を行ない、成仏したうえで再生することを、擬死再生を示す一連の所作によってリアルに体得させる仕組みになっている。

その際、霊山の自然の中で自然智を得、自然法爾の境地のうえで自己の心身のあり方、生き方を知る如実知自身の境地に入ることを、峰入によって達し得た仏としての悟りの内容としている。また再生のシンボルとして重視された守護仏を入れた笈が重視されている。この笈が採灯護摩にさき立って峰入して出峰した山伏を思わせる旅の先達から本山衆に渡されていることにも注目しておきたい。

採灯護摩は剣、弓矢による除魔、煙や火による煩悩消除の後、本尊不動明王と同化した修法者が信者の守護を祈っている。火渡りは自身火と化した修法者が水で火を鎮めて渡っている。憑祈祷は憑りましの仏性を開き、法螺、錫杖で驚覚し、神霊を導く唱えごとで誘導することによって、憑りましに暗示をかけて憑依させている。なおこの後の神霊を返す所作は憑きものおとしと同じメカニズムのものである。憑きものおとしや調伏では患者の仏性を開かせたうえで、採灯護摩の前作法でも用いられる剣や弓矢、錫杖などを用いて、邪霊を祓っておとす形がとられている。その際のこれらによる威嚇は邪神、邪霊の祟りに悩む患者には補償の機能をはたしている。追善供養の絵ときでは死者が母なる大地で仏として再生することを、未亡人に女性としての自然の摂理（おのずからの道）ともいえる受胎、妊娠、出産を追体験させる形で説明し、その実施をすすめている。

以上のように修験道儀礼では総じて入峰修行の即身成仏と擬死再生を象徴するモチーフが、追善供養のみならず、ほとんどの修法の最初に用いられる護身法、九字にも認められる。また採灯護摩の前作法の弓や矢による除魔は憑きものおとしや調伏にも用いられている。なお憑祈祷と憑きものおとしの修法は表裏一体となっていることにも注目しておきたい。

参考文献

宮家準 2002「民俗宗教の自然観」（宮家『民俗宗教と日本社会』第 2 章 東京大学出版会）
宮家準 2001『修験道―その歴史と修行』講談社学術文庫
宮家準 1970『修験道儀礼の研究』春秋社